
ポケアビ

不知火 螢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケアビ

【Nコード】

N3491T

【作者名】

不知火 螢

【あらすじ】

シンオウ地方でチャンピオンになり、お手製の改造バッグ（ポケモン30匹連れて歩けるよ）を腰に携えポケトレ使ってまだ見たことのないポケモンを乱獲していたら、別の地方からやってきた強敵と出会いました。ダブルバトルを申し込まれたので、何を思ったのかディアルガとパールキアを同時に戦っていたらなんと！ 気付いたら見知らぬ場所にいました。 捏造キャラが勢ぞろい。でもゲームの仲間には厳しめです。

ポケモン主人公（女）がオールドドラントに放り出されてアリエッタと姉妹になりました。

ポケモン込みは強いが本人とことん弱い。流され系主人公。とことん捏造しちゃうわよ編。

諸事情によりサーバダウンから再開できないでいる自サイト「うらくえん。」からの転載です。

人が人の形をしたモノかと問われれば、私は人だと答えよう

「出来損ないとは言え自力でザレッツホ火山の火口から戻ってきたのだ。多少は使い道もあるだろう。お前が育てる」

なんか言った。

この髭、なんか言った。

この髭なんかとんでもないこと言っちゃったよ。

主席総長に呼び出された新米導師守護長奏士ヒカリは、とりあえず上役に言われたことを脳内で繰り返す。

意味が分からなかった。

「……ゴメン総長、もっかい言つて？」

「出来損ないとは言え自力でザレッツホ火山の火口から戻ってきたのだ。多少は使い道もあるだろう。お前が育てる」

うわ、一字一句変えずにそのまま言ったよこの自称25歳。この人本当に私と3歳しか変わらないんだらうか。ありえない、絶対ありえない嘘だね。だって老けすぎてる。13歳離れてるとかなら信じるけど、絶対この顔で25歳は。

「……ヒカリ、全部口に出ているぞ」

「え、うっそリグレット本当？ ……聞かなかった方向でお願いします、総長」

親友であるリグレットの言葉に慌てて上司の顔を見る。そして即行で顔を逸らした。

ヴァンの米神に浮かんだ青い四辻を、ヒカリはあえて見なかった

ことにする。

「で、えーっと……何でしたっけ？」

「……このポンコツ脳みそが！ 一度で話を理解しろ！」

「何言ってるんですか総長！ 私の脳みその何処がポンコツだというんです！ これでも神託の盾一の事務処理の早さを誇ってるんですよ！？ ほら、私ポンコツ脳みそじゃない！！」

「何故神託の盾の人間が事務処理の早さを自慢しているんだ！ そのういつところがポンコツだと言うのだ！ 仮にも神託の盾を名乗るのなら戦闘能力を誇れ！！」

「えー、だって私、神託の盾で最も弱い兵士の自信ありますよ」

だから、何故そうも自慢できないことをさも誇らしげに言うんだ、この仮にも導師守護役を束ねる立場にいる人間は。

だめだ、このままでは話がどんどんおかしな方向へとずれて行く。ヒカリとの会話に慣れていないヴァンは、この数分にも満たないやり取りだけで確信し、後のことを己の副官であるリグレットへと任せる。

「お前にはアリエッタを育てた、という実績があるからな。この導師のレプリカを任せたいのだ」

「アリエッタを育てたのは私だけじゃなくって母さんもんですけど」「そうだな。だが、ライガクインだけでは、アリエッタはあのようになかっただろう。お前が居たからこそ、今のアリエッタがあるのだ」

「うーん、そういわれたら確かにそうなんだっけと思わないこともないけれど……」

「凄い、凄いぞリグレット！ よくあのヒカリ相手に普通に会話が続けられるものだ！ 流石に親友をやっているだけはあるな！」

ヴァンはこのとき初めて、己付の副官を尊敬した。リグレットを見る目がちよつとキラキラしていて、正直気持ち悪い。

リグレットは視界の片隅に映る上司の姿を脳内から削除した。

「それで、だ。お前に、この導師のレプリカを任せたいのだ」

「……それよりもさ、一つ、聞いておきたいことがあるんだけど」

「何だ？」

先ほどから一言も喋らない、深緑の髪をした少年。その少年の顔には見覚えがある。

それはそうだろう、先ほどからリグレットが言っている。導師のレプリカ、と。

確かに導師イオンのレプリカの存在は知っている。何せ被験者となった導師本人から聞かされているのだから。

しかし、その導師のレプリカとは一体何人いるのだ。ヒカリは、導師の身代わりとなるために、現在被験者と交互に導師の仕事に付いているレプリカただ一人だと、思っていた。

今このときまでは。

すっ、とヒカリの目が細められる。と、同時にリグレットは思わず銃を構えてしまいたくなるほどの殺気を感じた。

殺気の出所は親友ではない。この親友は所構わず誰かに殺気を放つような人間ではないし、それ以前に任意に殺気を放つなどという芸当は出来ない。

ではこの殺気の主は誰だ。

決まっている、常にヒカリに付き従う、相棒と呼ばれる可愛らしいペンギンの姿をした魔物だ。

見た目は非常に可愛らしいヒカリの相棒だが、一度戦闘となればその可愛らしい姿とは裏腹に、ヒカリの手足となり敵を殲滅する。

その戦闘能力の高さは、リグレットは幾度も間近で見てきたので嫌
と言っほど熟知している。

「イオン様のレプリカって……一体何人いるの？ 私、てつきり今
導師の代わりとなっている子だけだと思ってたんだけど」

ヒカリの声に、先ほどまで雰囲気は欠片も無い。だが、責めてい
る訳でもない。ただ、純粹にヒカリは気になったから聞いているだ
けだ……。リグレットはそう己に言い聞かせる。

「……七体だ。お前の知っているレプリカは、七番目の導師のレプ
リカに当たる」

「……ふーん、七人、ねえ。で？ その七人目の子と、ここに居る
子以外、どこにいるわけ？」

ああ、そういえばさっき、火山の火口がどうのって、言っ
たっけ？ ねえ、あれ、どういう意味？

何時の間にか、ヒカリの周りには相棒の魔物以外にも、いつも連
れているという魔物たちが赤い光と共に現れ始めていた。その数お
よそ十。連れているという魔物の半数には満たないが、何時の間
か出現している。

しかも、その魔物たちは姿かたちは小柄だが、リグレットの知る
限り、特に戦闘能力の高い魔物たちばかりだ。
ごくり、と思わず音とたてて唾を呑みこむ。
まずい、と本能的に察知する。

「か、閣下……」

どうしますか、と指示を仰ぐようにする。

いくら主席総長とはいえ、ヒカリの魔物（それも十体）を相手では流石に分が悪い。何せ、ヒカリ自身には本人が自負しているように大した力は無いが、ヒカリと妹のアリエッタが各々使役する魔物たちは、神託の盾ではトップクラスの殲滅力を持つ。一体一体でもかなりの力を持つのに、彼の魔物たちは連携を得意とし、尚且つその実力はヒカリの指示の元、真の力を発揮する。

場合によっては、一個師団と同等、時にはそれ以上の力を発揮するのだ。

しかし、その実力を正確に把握していないのか、それともこれは単なる脅しだと思っっているのか。

ヒカリ自身とさほど交流の無いヴァンは、リグレットとは異なり焦りを覚えては居ないようだった。

「廃棄した。ザレッツホ火山の火口にな。その導師の成り損ないは、火口に捨てられてなお、自力で戻ってきた。それだけの力があるのならば、有効活用しない手は無いだらう」

「ふ〜ん……殺したんですか。他の子たち、皆」

「殺した？ おかしな事を言う。「殺す」という言葉は生きているものに対して使われる言葉だ。レプリカは所詮人形。作りものに過ぎない」

それまで闇しか宿していなかった少年の瞳が微かに揺らいだのを、ヒカリとリグレットは見た。

しかしヴァンは決して少年自身を見ようとはせず、ただ嘲りの瞳を向けるだけだった。

「レプリカが人形か否かの議論は止めましょう。どうせ何処までいったって平行線で、お互いの価値観が重なることなんてありえないでしょうから。まあ、いいですよ。この子は私が面倒見ます。元々

イオン様からはレプリカの面倒を見てくれ、と頼まれていましたから。そうそう、レプリカに関しては一任されていた私に何の話もなく勝手にレプリカたちを「殺した」事に関しては後ほどじっくりと聞かせていただきますよ。……リグレット、勿論キミもね」

さあ、行こう、少年。

七人目のレプリカ以外ではただ一人生き残ったレプリカ 後にシンクと名付けられる少年と、オールドドラントの人間には「魔物」としか映らないらしい長年の友人たちを引き連れて、ヒカリはヴァンの部屋を後にした。

誰に何と言われようとも、私たちは家族である

あの男は命を何だと思っているのだろう。

勢いよくドアを閉めたヒカリの頭はそんな疑問で一杯だった。

「おいで、こっちだよ」

ヒカリの自室へと向かうために主席総長から託された少年に笑いかけ、歩き出す。

正直、素直についてきてくれるかすら心配だったがその心配は杞憂だったようで、ヒカリが先に歩き出すとそのまま歩き出した。

そのことに内心安堵し一度前を向くが、はっ、とヒカリは歩みを止める。

「そつだ、怪我！ 怪我とか、火傷とか、もう大丈夫なの？ あの男がまともに手当てするとは思えないんだけど！」

ヒカリが歩みを止めると少年もそれに続いて歩みを止める。

少年はヒカリの言葉に首を縦にも横にも振ることは無かったが、その後に関われた「身体に触れてもいい？」という言葉には、しばし間はあったもののゆっくりと頷いた。

「ちょっとゴメンね……うん、大丈夫みたいだね。いくらあの男でもその位はちゃんと手当てしたか、或いはリグレットか……」

多分リグレットだな、と思いつつも再び歩き始める。

ヴァン・グランツは完全に「レプリカ」とい存在を認めずに蔑んでいる。この少年をヒカリに預けたのも、使えそつだが自分の元に置いておくのは嫌だ、ということなのだろう。

「ポチャ」

「おっと、いけないいけない」

腕の中の、呆れたような相棒の鳴き声に、ヒカリは我に返る。

「あ、そうだ！ 名前、決めなくちゃね」

ね、と振り返り少年を見るが、少年はヒカリを見ることもなく、変わらず絶望を瞳に宿してただ歩いている。

しかしヒカリは特に気にすることなく、朗らかに笑ったまま「どんな名前がいいかな」。あ、古代イスパニア語の辞書とか借りてこよう」と少年の名前をどうしようかと考えている。

「ポチャ」

「うん、そうだねポッチャマ」

「ピチュ！」

「ピチューも嬉しいんだね」

ヴァンの部屋でモンスターボールから出てきていたポケモンたちはしきりに同意したように鳴くものや、頷いたりしている。

それでも少年は決して反応を返さない。

しかしそれも仕方ない事だとヒカリは理解しているので気にしない。

生きたまま火口に落とされたのだ。こうして素直に付いてきてくれるだけでも十分嬉しい事だ。

「ここ。ここが私の部屋。今日から君の部屋でもあるからね」

ヴァンの部屋からはフロアすら異なる場所の角部屋にヒカリの部屋はある。

15歳で神託の盾騎士団の士官学校に入学し、17歳で卒業。その後五年でいつのまにか奏士にまでなっていたので、それなりに優遇された生活を送っている。

奏士にまでになったのはどう考えても導師がごり押ししたのではないか、とヒカリは思っているが便利な生活ができるのならばそれにこしたことは無い。しよせん、奏士と言っても神託の盾の一兵士に過ぎないのだ。少しでも生活が楽になるのならばそれに文句をいうことなど何も無い。

「今日から私たちは家族だよ。キミが弟で、私はお姉ちゃん。……あれ、子供とお母さん？ まあ、どっちでもいいか」

部屋の中に招き入れてから「後でベッド発注しないとね」と呟き、それからニツコリとヒカリは満面の笑みを浮かべる。

そして、ぎゅっ、と少年を抱きしめる。

力を入れすぎず、かといって恐る恐るというわけでもなくしつかりと。

「私たちは家族だよ。この子たちも、皆家族。だから絶対……あの男の好きにはさせないからね。私たちがキミを守るよ。何が何でも守るから。だからいつか」

少しでも、生まれてよかったと。

そう、思っほしい。

直ぐには無理かもしれない。一年後、二年後。或いは五年後、十年後。

人生マイナスでスタートしたかもしれない。それでも、ほんの少しでもこの子どもに生まれてよかったな、と。プラスマイナス大きくプラスでなくてもいいから、ちょっとだけでもプラスな人生を送って欲しい。

言葉にはしないが、変わりにそんな思いを込めて抱きしめる。

結局、少年はそのまま特に反応を返すことは無かったが、この日は一つしかないベッドに二人で眠る。

二人の周りには比較的小柄で部屋に出てきても邪魔にならないポケモン達も、ベッドの周りで眠った。

後日、ヒカリは同僚に古代イスパニア語の辞書を借り、幸福^{シン}を掴む^ク者と少年に名前を贈った。

誰に何と言われようとも、私たちは家族である (後書き)

多分辞書貸してくれた同僚はディストだよ。

ヴァンデスデルカで栄光を掴む者なんだから、シンクで幸福を掴む者は短いかな、とは思ったけれどルークで聖なる焔の光だしね。ありだよ。

貴方がソレを望むなら、私はソレを叶えましょう

現導師であるイオンとその導師のレプリカとして誕生した導師になる予定の少年は、入れ替わっても気付かれない様に入れ替わるのではなく、交互に導師として仕事をこなしていた。少しでも違和感を感じさせることのないようにと、苦肉の策である。

今日の導師は被験者であることを確認してから、ヒカリは先日ヴアンより託された導師の五人目のレプリカの少年　シンクと名前を付けた　を連れて導師の私室へと足を運ぶ。

導師の私室は教会内でも更に奥まった所に存在し、その正確な場所は秘されている為にその部屋に訪れる人間は限られている。自分と同じ導師守護役か詠師以上の教団関係者、それか神託の盾の幹部位だろう。

しかしシンクの姿を一般の教団員に見られる訳にはいかないのです。シンクには僅かな視界を残し後は頭から爪先まですっぽりと隠れるフード付きのマントを羽織ってもらっている。

見るからに不審者の格好になってしまったが、今の段階でシンクの姿を誰かに見られるよりはマシだろう、とヒカリは気にしないことにした。

幸いなことに誰にも遭遇することなく導師の私室へとたどり着いたヒカリは、安堵の息をつきながらコンコン、と軽くノックする。導師が直接出てくることはない。在室しているのならば導師付きの導師守護役が出てくるはずだ。

そしてそれは余程の事がない限り、ヒカリの妹のアリエッタのはずである。

「お姉ちゃん！」

案の定顔を見せたのはアリエッタ。
アリエッタは姉の姿に嬉しそうに笑う。

「アリエッタ、お姉ちゃん、ちょっとイオン様に大切なお話があるの。他の人が来ても通さないでくれるかな？」

ヒカリはアリエッタと共に顔を覗かせた弟に当たるライガの頭を一撫でしてから用件を告げる。

アリエッタは姉の隣にいる不審人物のように姿を隠しているシンクに一度視線をやるが、すぐに頷いて部屋へと通してくれる。

アリエッタにとって姉であるヒカリは敬愛するイオンと同等、或いはそれ以上に信頼し尊敬している人物である。その姉が導師に危害を加える存在を導師に合わせるはずがないとい知ってる。そして同時に己の仕事に誇りを持っていることも。

自分は完全に部屋の外にでる。

導師守護長である姉が導師に大切な話があるからと自分に人払いを頼んだということは、自分も含め人には聞かれる訳にはいかない話があるということだ。

「ありがとうアリエッタ。後お願いね」

シンクを伴いそのまま導師の部屋へと入っていく。

導師の部屋はまず、導師守護役が何が起こっても大丈夫なように控えている小さな部屋がある。その部屋を通過すると導師の執務をする部屋があり、さらにその奥に私室、という造りになっている。

もし万が一、導師の命を狙う不貞のやからに導師の私室の場所がばれても、まずは導師守護役が控える部屋を抜けない限りは導師の部屋へとたどり着けないようになっていたのだ。

導師の私室の方は、窓も壁も技術者の街、シェリダンとベルケンドの知恵と技術の結晶であるらしいが、残念なことにヒカリは音機

関の方面にはとても疎いために、何がどうすごいのかもよくわかっていなかった。単に、どうやらものすごく丈夫らしい、とう認識である。

「イオン様、ヒカリです。少しお話したいことがございます。よろしいでしょうか」

「ヒカリ？ 構わないよ」

執務室へと繋がる扉をノックする。

ノックのアリエッタでないことに驚きながらも、直ぐに入室の許可が降りる。

失礼します、と声をかけてから入室をし、扉を閉める。

「珍しいね、ヒカリが僕のところに来るなんて」

「そうですか？ 少し前までは毎日のようにここに詰めていたじゃないですか、アリエッタと一緒に」

「そうだね。でも、守護長に任命してからは仕事が増えたと言ってあまりこちらに顔を出さなくなったよ」

おかげで、アリエッタが寂しそうにしていたよ。勿論、僕もだけだ。

おどけたようにイオンは笑い、逸れにつられたようにヒカリも笑う。

普段は導師として他の者に隙を見せず、孤高の存在であるイオンも、アリエッタとヒカリ、二人の姉妹の前ではただの少年のように戻る。特に、ヒカリの前では顕著に表れる。（アリエッタには、少しでもいいところを見せようと必死なだろう、と不敬にもヒカリは勝手に思っていた）

「それでヒカリ。話とは……」

ちら、とアリエッタと同じように、どうみても不審人物なシンクに視線をやる。

それに気付いていながらも、ヒカリはあえてそのことには触れずに話に入る。

「イオン様。イオン様は、ご自身のレプリカが何人生まれたか、ご存知ですか？」

「僕のレプリカ？ ……今隣の部屋にいる、僕の後の導師となるレプリカだけじゃないの？」

「……イオン様もご存知ではなかったのですね」

はぁ、と失礼だとは分かっているけど、溜息を付かずには居られなかった。

それにイオンは眉根を寄せる。

別にヒカリの態度に不満があるわけではない。ただ、純粹に意味が分からないのだ。

「ヒカリ？」

「これからが本題です。 シンク、フードを取って」
「……………」

シンクは無言のまま、言われたとおりにフードを取り、素顔をイオンに見せる。

フードの下から出てきた自分と全く同じ顔に、イオンは一瞬息を呑む。

「ヒカリ、これは一体どういう……………」

「どうやら、イオン様のレプリカは七人、生まれていたそうです。

現在隣の部屋にて隠れている子は七人目。この子は五人目だそうです

す」

「……後の五人は、どこにいる」

「ヴァンが殺したそうです。ザレッツホ火山の火口に生きたまま、突き落として」

シンクもその一人でしたが、どうにか生き残り自力で戻ってきたところをヴァンに見つかったようです。

自分の手駒にするために、私に教育をしろ、と。

ヒカリの話を聞いていくうちに、どんどんイオンの表情が険しくなっていく。

当たり前だ。例えレプリカと呼ばれる存在であっても、彼らは生きていく。感情もあり、当然ながら痛覚もある。一般的な感覚を持っている人間ならば、生きた存在を火口に落としたなどという話を聞けば、誰だって嫌悪するだろう。

しかし、そんなことがあったのならばシンクの瞳が、どこまでも絶望に染まっているのには納得だ。

イオンと全く同じ顔をしているハズなのに、ヒカリには全くそうは見えないのはきつと、この瞳が原因だ。

「……ヴァンも馬鹿だね。ヒカリが素直にヴァンの手駒を育てるわけなんて無いのに」

「ええ、本当にそうですね。リグレットが言うには私にはアリエッタを育てたという実績があるから、任せたいってことでしたけど。多分、リグレットは私が素直にヴァンの言うとおりに動くように育てるわけが無い、と分かかって私に任せろべきだ、とヴァンに言ったんじゃないですか？ リグレット、まだヴァンに復讐諦めてないみですし」

ああ、リグレットも預言を恨んでるんだっけ……

イオンの眩きにヒカリは頷く。

預言を恨んでいるリグレットがヒカリの親友をしていられるのは、年が近いこともあるが、ヒカリは神託の盾に在籍していながら全く預言を信じていないからだ。

オールドラントに来る前は預言など存在しなかったし、オールドラントにきてから五年間はライガと共に生活していた。その後は神託の盾で生活していたが、流石に十五まで全く預言に頼ることがなく（それどころかヒカリは預言の存在すら知らなかった）暮らしてきたために、今更預言は絶対だ、などと言われても「そんなわけねー」としか思わない。

そんなヒカリの存在は、復讐のためとは言え預言が絶対という人間ばかりの神託の盾に在籍することになったリグレットにとっては、とてもありがたい存在だった。

「それで、僕に何を求めるわけ？」

「求めるといいますが、どうしましょって言いますか。シンクは私が育てます。預言だとか、ヴァンの目論見だとかは私には関係ありません。私はただ、一人の人間として、この何も知らない子どもを育てたい。幸せを知ってもらいたいと、決めましたから。ただ、アリエッタが……」

「あ」

皆まで言わずとも、導師はヒカリの言いたい事を察した。

シンクの姿を人に見られるわけには行かない。故に、ヒカリの部屋と一緒に暮らすのだらう。ヒカリは神託の盾でも奏士というかなり高い階位にあり、その部屋のある区域に一般兵は入れない。それは問題ない。

しかし、アリエッタとヒカリは姉妹であり、妹が姉の部屋に唐突に訪れるのは何時ものことであり、そして二人の部屋は隣同士だったりする。

被験者である導師イオンはアリエッタには自分の死を隠し続けた
い、と願っている。

自分が彼女にとってどういう存在であるか理解しているため、自
分が死んだら彼女は悲しむ。しかしアリエッタには悲しんでなど欲
しくない。そんな理由から、ヒカリにはとにかくアリエッタには自
分の死を隠しつづける、という命令を与えている。

むしろ、その命令のために導師守護長に任命し、レプリカイオン
のフォローを任せただ。

だが、それもイオンと同じ顔をしたシンクが直ぐ側に居れば、ば
れてしまう可能性が高い。例えば顔を隠して生活していたとしても、
無理が生じる。

ヒカリは、それを相談してきたのだろう。

瞳を閉じ、イオンは考える。

それを、ヒカリは真剣な面持ちで、シンクはとにかく絶望を宿し
た瞳で見つめている。

「……ヒカリ。アリエッタには」

イオンの出した結論にヒカリは瞠目する。何かを言いかけ、そし
て自分でもその何が「何」なのか理解することなくその言葉を飲み
込む。

「了解いたしました。全ては猊下の望まれるがままに」

ヒカリは跪き、頭をたれた。

貴方がソレを望むなら、私はソレを叶えましょう（後書き）

ヒカリさんは、徹底的にレプリカを人扱いします。だから五番目とか七番目、とは言わずに五人目、七人目、と呼びます。

これはもうヒカリの維持と言うかポリシーというか。

あと、なんか漫画ではイオン様自ら一番目のレプリカを殺したというようなシーンがあるらしいんですけど、この話ではその設定はなかったことでお願ひします。だから、シンクの存在には驚いたってことで。

おやすみなさい、良い眠りを……

「おやすみなさい、イオン様……」

夜の帳は完全に下り、何一つ音も無い夜の静寂の中、ローレライ教団の自治区であるダートにある一室で、導師イオンは永遠の眠りについた。

本来ならば大勢の人間に看取られ、逝くはずの人間なのだが、彼の最期を看取った人間は、ヒカリと主治医のようなものを努めといったデリストだけ。

イオンの遺言とはいえ、せめてアリエッタにはこの場に居て欲しかったと、ヒカリはぼんやりと思う。

「ヒカリ、泣いている暇ありませんよ」

「うん……分かってる。分かってる、けど……」

極力感情を押し殺した声のデリストに、ヒカリは怒りを覚えることなくただ泣くのを堪えて応える。

そう、デリストの言う通り泣いている暇などない。このまま誰にも導師の死を悟られる事なく、イオンの亡骸を運び出さなければならぬのだから。

「導師イオン」は生きている。周りにそう思わせる為に。

それでも、イオンは導師となる前からヒカリにとっては弟のようなものだった。

デリストとて悲しくないわけではない。生意気だと思ったことは幾度もあったが、預言のせいで生まれてすぐに両親から引き離され、大人に成らざるをえなかった21も年下の導師を、デリストは嫌いではなかった。

故に、ヒカリの目からこぼれた一筋の涙を見なかったことにした。

彼の愛したアリエツタは彼の死を知らない。ならば、彼が姉の様に慕っていた人物の心からの追悼位は許されるだろう。

「サファイ、イオン様を母さんの森に埋葬してくる。あそこなら皆がいるし、それに他の魔物に掘り返されることも無いだろうから」

「そうですね。ライガ・クイーンがいる場所ならば、人間も立ち入ることなど滅多にないでしょうし、他の魔物も愚かな真似はしませんね」

ライガは魔物の中でも上位種に当たる。

魔物は愚かな人間とは違い、決して己よりも強い存在には逆らわない。なぜならば魔物の世界は弱肉強食。己よりも弱者は獲物となるが、強者からみれば己が獲物となるのだから。

「一応、日付が変わるまでには戻ってくるつもりだけど、後のフォローはお願い」

「出来る限りのことはしますが、あまり遅いとアリエツタが怪しみます。それにシンクはまだ貴女にしか心を開いていないんですから早めにお願ひしますよ」

シンクがヒカリに預けられ、それほど長い時間が経ったわけではないが、可能な限りはシンクと一緒に時間を過ごし、自分が一緒にいられないときでもポケモンたちには一緒に居て欲しいとお願いしているし、返事が返らないと分かっている、にこにこシンクに声を掛け続けていた。

シンクはそんなヒカリが自分を傷つけたり、利用したりしようとする存在ではないと認めたのか、徐々にヒカリの言葉に対して頷くなどのジェスチャーだけではなく、言葉で返事をするようになってきた。

まだまだ表情の変化は乏しいというよりも殆どないに等しいが、

少しずつでも確実にヒカリにだけは心を開きかけてきていた。

「分かってる。ポッチャマ、シンのこと、お願いね」

「ぼちゃ！」

まかせろ！ とても言うようにヒカリの相棒は胸を張る。

ポケモンというのは実に人間くらい仕草をする魔物だな、と改めてポッチャマをディストが観察をしている間に、ヒカリは腰のバッグからひとつのボールを取りだし、窓の外にカイリユーを出す。

痩せほそってしまったイオンの身体は力のないヒカリにも抱き上げることは可能だった。カイリユーにしっかりと預けてから常に側にいる相棒のように、余程のことがない限りはヒカリの肩や頭の上に乗っているチルットに指示をだす。

「チルット、母さんのいる森までお願い」

す、とヒカリが腕を差し出すとチルットはそのヒカリの腕を掴み、そしてヒカリはそのまま外に飛び降りた。

チルットはヒカリの生まれた世界では綿鳥ポケモンと呼ばれていたように、まるで綿毛のような翼を持ち、重さも1.2kgと非常に軽いポケモンだがそのまま重力に従うことなくチルットはライガ・クイーンのいるマルクト北部の森まで飛びたつ。その後をカイリユーが後を追う。

「ポッチャマの人間くさい仕草といい、1.2kgしかないチルットがヒカリの体重を支えきる力といい、本当にポケモンは興味深い生き物ですね……」

飛び立ったヒカリたちの姿をみて、しみじみと呟くディストの姿を見上げながら、「この人間もナナカマド博士のようにポケモン研

究者になるんだらうか？」などとポツチャマが考えていたかどうかは、定かではないが、少なからずとも「導師イオン」の死を悲しんでいるのは真実だった。

「母さん、イオン様を、守ってあげて。この人は、アリエッタを異性として、愛してくれてたんだよ」

「空をとぶ」というポケモンの攻撃技は、その名称のとおり、高く飛び上がり、急降下して敵に大ダメージを与えることもあるが、トレーナー（ヒカリの生まれた世界ではポケモンを扱う人間をそう呼んでいた）を遠く離れた場所へと連れて行くことも可能だった。船や徒歩などを駆使した通常の移動では何日も掛かる場所までも、ヒカリはポケモンたち、アリエッタならばフラスベルグに願えばさほど時間は掛からない。

夜明け前にマルクト北部の森へと到着したヒカリは、第二の母たるライガクイーンへと、ここにイオンの亡骸を埋葬したいと申し出る。

ライガは特に夜行性というわけではないが、遠い地にいる家族の訪問に、ライガたちは暖かくヒカリを出迎えてくれる。

「それに、あの子もね、イオン様が好きだった」

ヒカリの言葉に、ライガクイーンはカイリユーが抱きかかえていたイオンの顔を覗き込み、そして血の通わなくなり死後硬直の始まったその顔を一舐めする。

その行為に、イオンを埋葬することを許されたと悟る。

「母さん、ありがとう」

ぎゅ、と母の首に顔を埋めるように抱きつき、これまで堪えていた涙を思っ存分流し始めた。

暫くの間、声を出さずに泣いていたが、イオンをこのままにしておくわけにもいかない。気持ちが落ち着き始めた頃、顔を上げ頬に残った涙の痕をライガクイーンが舐め上げた。

「ありがとう、母さん。大丈夫だよ。私は、大丈夫」

それは自分に言い聞かせるように、何度も何度も、大丈夫、大丈夫、と反芻する。

その後、荷物の中からシャベルを取り出し穴を掘り始める。その行為をライガたちが手伝おうとするが、ヒカリはそれを制した。弟のようなイオンを埋葬するための穴は、ポケモンたちの力も、ライガたちの力も借りずに自分ひとりで成し遂げたかった。

神託の盾で最弱だと自称するヒカリは、実際あまり体力はあるほうではなかった。

軍属ゆえ民間人よりは体力はあるが、場合によっては農夫や工夫より体力は劣るだろう。ヒカリの真価はポケモンと一緒に戦うことで発揮されるのだから。

それでも、自分の力だけで何とか穴を掘り終わり、カイリユーに預かってもらっていたイオンの身体を抱き上げ、掘り終えたばかりの穴にそつと横たわらせる。

「イオン様、どうか、次の生では預言なんか振り回されない人生を、歩んでくださいね」

類に親愛のキスを贈り、改めて、追悼の祈りを捧げた。

その後、まさかたった一日神託の盾本部を不在にしていただけで、妹だけではなく導師守護役全員が解雇となり、人事移動させられてしまうとは、思ってもみなかった。

おやすみなさい、良い眠りを… … (後書き)

神託の盾の人間って、国境越えるのにやっぱり旅券必要なのかしら？ 旅券ってあれだよな。パスポートとか、ビザのことだよな？

つかビザ発行済みのパスポート？

…… ヒカリさん、これじゃあ不法入国ですか？ あれ、でももともとマルクトに居てダアトに行っただから持つてるのかな？

こんなところでなんですけど、ヒカリさんとデリストは仲いいです。もちろん本名も知ってます。(だから人がいないときはサファイ呼び)そしてこのデリストはかなり捏造入ってます。(見れば分かるよ)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3491t/>

ポケアビ

2011年10月10日12時16分発行